前　奏	黙想	祈　禱	
讃 美 歌	67 よろずのもの	讃 美 歌	252 主よ、今わが身は
祈　禱		献　金	
信仰告白	使徒信条	讃　詠	547 いまささぐるそなえものを
聖　書	イザヤ書 3:18~23	黙　禱	
	ルカによる福音書 15:8~10	主の祈り	564
讃 美 歌	191 いともとうとき	讃　詠	546 聖なるかな
説　教	『 神の不全感、という恵み 』	祝　禱	後　奏

「その日には、主に飾られた美しさを奪われる。足首の飾り、額の飾り、三日月形の飾り、耳輪、腕輪、ベール、頭飾り、すね飾り、飾り帯、匂袋、お守り、指輪、鼻輪、晴れ着、肩掛け、スカーフ、手提げ袋、紗の衣、亜麻布の肌着、ターバン、ストールなどを(ｲｻﾞﾔ3:18~23)」。これらの宝飾品を身に着けているのは高慢な「シオンの娘(3:16)」。すなわち比喩で「イスラエルの民」のこと。

終わりの日、主によって「飾られた美しさが奪われる(3:18)」ことはひとまず置いておき、女たちがまとうファッションに注目しよう。日本ではギンギラギンに着飾ることは少ないが、私が子供の頃のオバサンやオジサンは獅子舞のように金歯をギラつかせていた。インドから西アジア中近東の女の人は、貧しくとも宝飾品をいろいろつけていて、おそらくそれが彼女らの全財産だろう。

「ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか(ﾙｶ15:8)」。1 ドラクメは 5 千円くらいか。だから女の全財産は 5 万円。単に財産の 1／10 を失ったということではない。西アジア中近東の貧しい女たちを思い描くと、銀貨とは貨幣のことではないんじゃないか、彼女らが身に着けている耳輪や腕輪、指輪や鼻輪のことではないのか、と私は想像する。だから指輪でもたった一つ無くしただけで強烈な不全感におそわれ、それを血まなこになって捜す。イエスは神の御心を、こんな女たちに重ね見た。

「無くした銀貨」のたとえの前には「見失った羊」のたとえがあり、後には「放蕩息子」のたとえがある。そのどれもが「①無くした⇒②見つける⇒③喜ぶ」というパターン。イエスは、凝り固まったファリサイ人や律法学者に語っているので(15:2)、懇切丁寧に三つのたとえ話をした。ファリサイ人らの頑なさのおかげで、私たちはこうしたたとえを聞くことができる。サンキュー、ファリサイ人。

「見失った羊」の場合、神が羊飼いで私たちは一匹の羊か、それとも群れに残った羊か。群れとは教会の比喩だろうが、教会は「見失われる羊」が集まっている群れ。百匹の羊(15:4)の内、誰もが見失われる。教会という群れにしっかりつながっていることも大事だが、教会から離れて羊飼いに見つけてもらって皆に喜んでもらう(15:5~6)ことは、不安に怯える羊には特別の感謝となろう。ただこれは比喩だからいいのだが、実際には群れに連れ戻さず(15:6)、屠って食べちゃうから皆が喜ぶ。

個体の区別がつかない羊の群れよりも、無機物である「無くした銀貨」の方が、ある意味で人間の比喩としてはいっそうリアルだ。すなわち神としての女が身にまとう耳輪や鼻輪、足首の飾りや三日月形の飾り(ｲｻﾞﾔ3:18)が人間一人ひとり。私一人がいないがための神の不全感。「その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか(ﾙｶ15:8)」。宝飾品にその自覚はないが、神は必死にそれを捜す。キリスト者である私たちは、そんな思いをかろうじて知っているし、自分が見つけられた体験もあろう。だが世の多くの人は、神がそのように彼らを捜していることを、指輪や腕輪のようにまるで知らない。私たちはそんな神の御心を伝道しているのだ。

「一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある(15:10)」。悔い改めとは、私が見つけられ、それを喜ぶ神を承認すること。神に、見つけられるままにお任せすること。それが悔い改め。

悔い改め　私たちの能動的な反応とは限らない　羊や放蕩息子のように安堵できるならそれでいい 悔い改め　ただ見つけてもらうだけの全き受動性　神のともし火があってこそ存在が輝く　宝飾品
9/11(水)12:00～２:00 エステル会。9/14(土)1:30～3:00 聖書研究会(集会所)。 牧師の動き:9/11 甲府刑務所で集合教誨。9/12 山梨英和カートメルこども園で職員向けの聖研。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3
連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324　TEL 0551-25-4008
eﾒｰﾙは komechan.olive @ gmail.com　HP は「日本督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。